

かけだしの頃

今だから話せるゲンバの失敗

約二十六年前、入社四カ月くらいたった頃のことです。羽田空港が沖合移転することに伴い、海を埋め立てた敷地内に、幅二十から三十メートルくらい、長さ約一キロのかなり大きな排水溝を施工する工事でした。約十メートルを一基として順番に施工していく予定でした。

私は現場管理として、測量から型枠の墨打ち、鉄骨を組んだり、コンクリートの高さ出しや発注、打設まで、一つ上の先輩とともに作業を進めていきました。

失敗は、一基目のボックスが完成し、二基目のボックスができ上がった時に気付きました。一基目と二基目を繋ぐメタルのすじが合わないことに気付いたんです。

周囲から「測量を間違えたのではないか」という指摘をされました。私は測量には自信があり、最後は必ずベンチにぶつけて確認していたので、メタルのすじが合わない

事実がどうしても納得がいかず、先輩につき合ってもらい夜中までかかって、仮ベンチが間違っていないことを確認しました。しかし、翌日、測り直すとは違っている。

その時、上司におかしいとは伝えましたが、自分自身、何がおかしいのかわからない。うまく伝えられないまま、施工日も迫っていることもあり、そのまま、三基目の施工に入ってしまった。

三基目のメタルのすじが合わなかったとき、ベースを測り直したことで、盤膨れの可能性を指摘されました。急ぎ地盤の変動調査を行い、盤膨れにより一日一センチ、最終的に十センチも持ち上がっていることがわかりました。

すぐに事務所に走り主任に報告、結果としては作り直し。当時の土木部長から大変なお叱りを受けたことは今でも記憶しています。

日本国土開発株式会社
土木本部 土木部 工事部長

廣瀬 憲嗣

昭和61年（1986年）日本国土開発株式会社に入社。数々のシールド工事の経験を経て現在に至る。



今、考えると至極当たり前のことで、盤膨れを予測していれば、少なくとも三基施工することもなく、被害を最小にとどめることはできたはずで。

この時の失敗でどんなに巨大で重いものでも「動かないものはない。」ということを経験しました。構造物は動かないというような既成概念にとらわれず、事前に様々な予測をする。実際、同じ条件の現場はほとんどなく、同じ構造物を造る場合でも現場ごとにその対処は違ってきます。

最後に、若い方には、現場の経験を蓄積していつてほしいと思います。それは、今回お話ししたような失敗だけではありません。現場所長の指示、先輩技術者の施工管理、現場の状態（きれいかなど）の良いところを積極的に取り入れ、経験を積み上げていつてほしいと思います。